

マックス・ウェーバー

『ヨーロッパ諸列強のあいだのドイツ』

山 田 高 生 訳

凡 例

- 一 この翻訳の底本は、Max Weber, Deutschland unter den europäischen Weltmächten (Oktober 1916), in: Gesammelte Politische Schriften, 2. Aufl., hrsg. v. Johannes Winckelmann, Tübingen 1958, S. 152—172 である。
- 二 訳文中傍点を付した字句は、底本ではイタリックである。
- 三 訳文中「」型括弧は、底本では《》型括弧である。
- 四 訳文中（）型括弧は、すべて底本のままだである。

『ヨーロッパ諸列強のあいだのドイツ』

五 訳文中「」型括弧で囲んであるものには、J・ヴィンケルマンの挿入した字句と訳者の挿入した字句とがある。ただし両者の区別は指示していない。

六 訳注は、(1)、(2)の数字をもって示し、最後に掲げた。

私は政党人としてお話しするつもりはありません。私はいつでも国民的観点から政治を見てきました。対外政策ばかりでなく、政治全般についてもそうです。この観点にしたがって自分の支持政党も決めました。父と連れだつてはじめて投票に出かけたとき、父は自由主義政党内に、私は保守党内にいました。——今ではもう長いこと保守党内にいてはおりませんが。私は全ドイツ協会に入会しました。戦時中に、「全ドイツ協会」と上書きされている一通の回状を受け取りました。この回状は、私に（ほかの人にも）子孫にたいする烙印を通告したものでした。私は、わが国の不滅性にたいする配慮をこの協会のお人好連中と下手くそな楽士たちに委ねています。しかし、「この機会に」自分の旗幟を鮮明しておくのがよいと思います。

今日、「国内統一」について多くのお喋りが行なわれています。だがそれは、こう呼ばれるべきです。もっぱら国民的外交政策の観点からの統一——これです！ 自由主義的であるという理由から、イギリスとの提携に共感をよせた時期がありました。今や、こうした共感は永久に過去のものです。同じように、保守的であるという理由から、ロシアにたいし下品に媚をうる政党がありました。『十字新聞』はオルミュッツについて觀声をあげ、ニコライ皇帝の軍隊が進駐してくるのを待ちこがれていました。わが国がロシア政府からなんらの政治的代償ももらわずに警察の役目を果してやったのに、ロシアからは自由主義者の憎しみと——当り前のことですが——反

動連中の軽べつがはね返ってきました。これは、新聞を見れば誰にでも納得のいくことです。ロシアにたいするこうした内政上の共感も、今日では過去のものとなったでしょうか。私は断じてそうとは思いません。ベルリンの政治家の多くは、ロシアにたいし熱心に友好を申し出ています。ところがロシアの新聞は——反動的新聞までも——、このような友好の申入れにたいし侮辱と嘲笑をあげ返すにすぎません。これには、純然たる内政上の理由がひと役買っています。私はベルリンで、一度ならず十数回もつぎのような意見にぶつかりました。「イギリスとの協調はありえない、それは議會主義に導くから」だとか、「わが軍が万が一ベルギーから撤兵するようなことがあったら、あなたは国内政治をどうお考えになりますか、」こういった意見です。ご存知のとおり、こうした考えが——遺憾ながら——潜水艦戦争問題でもある役割を演じました。なぜなら、こうした意見がなければ、誰でも、外地で激しい戦闘を行なっている部隊にむかって、数ヶ月で戦争を終結させる方法があるなどと口先でだますのはけしからないと思っていたからです。わが国の戦争政策と和平政策に内政上の反感をからませる人たちは、国民的政治家とは言えません。だから、国内統一についてこうした連中と語ることはできないのです。

わが国のおかれている国際間の特殊な位置とわが国の対外的利害のみが、わが国の外交政策を定めるものでなければなりません。

では、わが国の対外的利害とは何でしょうか。わが国のおかれている特殊な位置とはどのようなものでしょうか。この問題についてお話しします。しかし、感情にではなく政治的思考に訴えて、冷静かつ学問的にお話ししたいと思います。

わが国の対外的利害は、純然たる地理的条件に著しく規定されています。わが国は権力国家です。どの権力国

家でも、他の権力国家が隣接していることは、その国の政治的決定の自由にとって障害となり得ます。なぜなら、隣接の権力国家のことを考慮しなければならないからです。どの権力国家でも、できるかぎり弱い国にしか、せめて、できるかぎり少数の権力国家にしか取り巻かれないことが望ましいのです。ところが、ドイツだけが大陸の三大強国と国境を接し、しかもそのうちの最強国と隣接し、そのうえ最大の海軍国とは間接的に隣り合わせです。したがってこれらの国々の邪魔になっています。わが国の運命はこのように定められています。地上のいかなる国といえども、このような位置にある国は他にありません。

この点から第一に、とくに強力な武装の必要が生まれます。わが国のもっとも徹底した平和主義者でさえ、もはや今日、このことに反対しないでしょう。しかし同時に、もちろん、つぎのことも帰結されます。すなわち、われわれは、わが国の政治をわが国の地理的状况に一致させなければならないということです。——これは一体どういうことでしょうか。

まず第一に、これは、われわれは——ビスマルクに言わしむれば——石を投げて窓ガラスをこわすようなやり方で政治を行なってはならないということです。すなわちわれわれは、溜飲を下げようとして、自分の権力手段を投入することができないか、投入しようと思ってもいけないことのためは、敵をつくるようなことがあってはならないということです。今日世間では、わが国の外交について非難の声があがっています。が、そこではいつも、ひとつのことが忘れられています。それは、国民の政治が間違った方向にむいているときには、どんな優れた外交といえども、なんら成果をあげることができないということです。ドイツの政治が喫した最初の敗北は、重大でしかもまったく無益な敗北であって、のちのちまで悪い影響を残しました。これについて、いつかは思い起さ

れるにちがいありません。この敗北は、ポーア問題における愚かな感情政治が招いたのです。現在「反政府活動」に従事している——外交に従事しているのではなく——のと同じ集団の指導のもとで、国民は誤りを犯かしました。われわれをこうさせたものこそ、まったく無計画な感情政治でした。あるいは——これを言いかえただけです——、全ドイツ主義の政治でした。しかもこれは、無数にある事例のたったひとつにすぎません。

つぎに、それは、われわれは冷^{ザッパツ}静^{ハツシ}な政治を行ないさえすればよいのであって、憎悪の政治を行なつてはならないということ。私は憎しみや怒りそのものに反対してはおりません。卑劣なものを憎むことができなければ、偉大なものを心から愛することはできません。ドイツ人の憎しみは、ひとたび心に刻み込まれるとなかなか解けません。イギリスがわが国にたいし従来の政策をとり続け、百年にわたる仇敵をつくることとしたら、たしかに愚かなことです。なぜなら、そのばあい事情によっては、わが国の方で体をかかわして切り抜けることなど事実上できないからです。しかしこれは、イギリスの問題です。いずれにせよ、今日われわれが政治的観点からではなく、——たとえどんな納得できるものであろうとも——憎悪の感情からわが国の政治目標を定めようとするなら、愚かなのはわれわれの方です。わが国にたいする憎悪は、フランスがもっともつよく懐いていますが、ところがわが国では、憎しみはもっぱらイギリスにたいして向けられています。これは、オーストリアの憎しみがイタリアにたいしてのみ向けられているのと同じです。双方のばあいについてこうした憎しみが人間的にみてどんなに納得のいくものであろうとも、——おそらく！——今大戦中に犯した真の失策は、まさしくこの憎悪という非^{ウシザツ}即^{ハツツ}事^{ヒカ}性^{キヤウ}から生じたのです。

さらに、冷静な政治とは、虚栄の政治、すなわち法螺と切り札の政治ではなく、無言の取引の政治を意味しま

す。しかしわが国の政治は、どのように営まれてきたでしょうか。たとえば同じ期間について、ドイツの植民地利得を他国のそれと比較してみるならば、ドイツの植民地利得はじつさい極端にわずかです。だがわが国では、このわずかばかりの利得によって、あたかも地球の半分を手に入れることが問題であるかのような大騒ぎをひき起しました。この大騒ぎを考えると、——そしてこれを他国の静かな沈黙と比較してみると、これは政治的にみてとても恥かしいことです。これは、国民の政治的無教育の産物、またもや、全ドイツ主義の産物でした。艦隊についても、ちょうど同じような現象が見られました。同じく全ドイツ主義の法螺吹きです。戦時中の今日でも、われわれはちょうど同じことを体験しています。「イギリスの世界帝国の終焉」ということが競争目的としてでっちあげられました。——あたかもイギリス世界帝国の基礎は、たとえばスエズ運河などを所有していることにあるのであって、いくつかの大陸に——一部はある大陸の全体に、一部はある大陸の半分に——植民しているアングロサクソン民族の国民共同体にあるのではないかのようにです。ところが、結局われわれは、これらの大陸からこの国民共同体を追い出すことができないのです。あるいは、イギリス海軍力の終焉について語られました。しかし、イギリスがハンブルク港を封鎖するのと同じように、わが国がリバプール港を封鎖することは、同じくらい強力な艦隊をもってしても明らかに不可能です。大ブリテンの地理上の位置そのものがハンブルク港の封鎖を容易にし、リバプール港の封鎖を妨げています。海峡に面した二、三の港を所有したとしても、事態はなら変わらないでしょう。「とんでもない、それならわれわれは、何のためにわが艦隊を使うのですか、」と私は大真面に質問されたことがあります。このような馬鹿げた質問にたいして、さいわいにも、スカゲラク海峡の輝かしい海戦⁽¹⁾は、われわれが何のために戦艦を使うのかをどんな素人にもわかるように示しています。もし戦艦が

なかつたら、わが国はイギリスのデンマーク上陸を許していただしよう。われわれは攻撃をしかけられたらばあい、わが国を攻撃するのに二の足をふませるほどこっぴどくイギリスをやっつけるために戦艦を使います。イギリスは今後も攻撃をしてくるでしょう。しかしわれわれは、結局はお互いに「全滅させる」ことはできないのです。わが国でもイギリスでもこのような法螺話はやめるべきです。

ビスマルクの『回想録』を聞けば、本文のなかの——かならずしも多くはありませんが——隔字体で印刷された言葉の一部につきのような警句がのっています。誘惑に負けて「虚栄」の政治にはしつたり、わが国の存在の地理的条件からふみ出すことを望んではないという警告です。この警告は、今日でもなお当てはまります。なぜなら、わが国の地理的状况においては、われわれは征服者の虚栄の政治を行なおうなどと断じて欲してはならないからです。周知のとおり、全ドイツ主義の影響下にある若干の利害関係者団体の建白書は、以前ベルギー全土とソナム河にいたるまでの北フランスにたいし併合を——あるいはもっとひどいことを、つまり公民権の保証のない服従を——要求しました。誰かがこのような——私からみれば——ひどく愚かな意見を懐いたとしても、ともかくその人には、そうした意見を主張する権利がありました。さらにその人は、政治機関に請願する手だてのほか、政党指導者と討議する手だてを持っていました。これらの紳士方は、まさにこうした道を歩もうとしていたのです。しかし、どんな事態が発生したでしょうか。この建白書は大変多く印刷され発送されたのです。その内容は短期間に外国の全新聞の共有財産となりました。だから、これがドイツの戦争目的になったのです。帝国宰相がこのような勝手放題なやり方に厳しく立ち向かわなかったこと、ベルギーにたいし「動産抵当」という表現を時を移さず強調し直さなかったこと——帝国宰相のこうした態度を、私は当初から彼の失策とみな

しました。全ドイツ主義の影響が彼の態度を妨げていたのです。その後、あの下手くそな計画はドイツの権威によってバック・アップされているものではないことが、誰の目にも明らかになりました。その結果、外国の反響はつぎのようなものでした。「ドイツはますます組みやすくなる、」だからドイツは弱いことを十分自覚している、これが外国の反響でした。しかし、これだけではまだ満足しません。このような虚栄の政治家の煽動は——その背後に一部物質的な利害が隠されていたことには触れないでおきますが——今や面子めんつを賭けるというところにまで及びました。「ベルギーを引き渡す者は負けた。」しかし、こんな言い方は、純粹に人間的にみても堪えられるものではありません。「われわれはこの地帯を征服した、われわれはこの地帯が引き渡されるのを望まない、」もしも外地にいる軍隊がこういった見地に立つなら、——さあ、われわれは、「用心しろ、それはおそらく賢くないことだ」と言わざるをえないでしょう。それでも軍隊がそのまま居坐るなら、——よろしい。わが部隊は、外地でドイツの栄光と名誉のために前代未聞のことをなし遂げ、変らぬ追憶を軍旗にしこませました。しかし、銃後の人びとが——事務所に居ようが、講壇に立っているようが、あるいはどこに居ようが——、わが部隊にたいし、不遜にもその素晴らしい成果の喜びを台無しにすることを望み、「もし地図がしかじかに変らないなら、君たちは無意味な戦いを行っているのだ」と述べるとしたら、——そのときには私は、そんな奴らの唇をぶんぐって黙らせるためにドイツのこぶしがあることを願うだけです。こんな奴らは、国民の重大時に代表としてももの言うべき人ではありません。それから、もうひとつ言っておきたいことがあります。同盟国が一九二〇年になって戦争を行なうということです。提督なら誰でも知っていることですが、艦隊のなかでもっとも遅い艦に歩調をあわせなければなりません。このことを政治に應用してみましよう。同盟国の実質的な生存問題のために、すべての

同盟国は思い思い長い間戦い続けるでしょう。だが、虚栄にみちた征服者の利益のために戦いません。わが国がたとえばオーストリアのベニスのために戦ったりしないのと同じように、他の同盟国はドイツのベルギーのために戦わないのです。

わが国の政治は、冷静な政治でなければなりません。たとえ戦争の興奮のなかでもです。ではそこから、積極的にどんな結論が導き出せるでしょうか。

まず第一に、わが国の地理上の位置から、遠い先まで見透した同盟政策の必要が生まれます。今日ではいかなる世界権力も——ロシアやイギリスといえども——、同盟を結ばないで世界政策を行なうことはできません。わが国は、他の国よりももっと、同盟を結ばないでは世界政策を行なうことができないのです。わが国は、多くの敵をむこうにまわしても自国だけで防衛することができません。が、世界のなかで話の仲間にはいることはできません。なぜなら、たとえばサモア諸島のために、今回のような世界の連合を相手に戦争を行なうことはできないからです。国民は、今日ほどバック・アップしないでしょう。だが、どんな同盟政策にも実質的な前提がどうしても必要です。その前提とは、選択の自由をできるかぎり保持することです。政策によって、あらかじめ可能性をひろく開いておけばおほくほど、それだけ好都合に同盟を結ぶことができます。わが国は、わが国の歴史的状況からつぎのように定められていたし、現在も定められています。

わが国の選択の自由には、すでにこれまでひとつの、絶対的な制約が存在していました。フランスです。フランスは、わが国の敵となら誰とでも手を結びましたが、われわれの味方になったことはいち度とてありません。一八七一年以後わが国の国際関係は、こうしたフランスの態度によってことごとく規定されました。

これに加えて、今日新しい難局が発生しました。このことを隠しておきたくありません。それは三国同盟の破綻⁽²⁾です。過去数十年間における三国同盟の唯一の意味は、選択の自由の保持にありました。この破綻によって、わが国の選択の自由はふたたび制限されました。かくしてわが国の政治は、いよいよもって世界の最大強国たるイギリスとロシアのいずれかを選ばなければならなくなりました。かならずしも同盟の形態をとる必要はありません。——もしも同盟という形なら、わが国は非常に有利なばあいだけにだけ同盟を結ぶことになりましょう。だが協調という形で十分です。わが国の選択の自由をこれ以上いたすために制限するものを、すべてできるだけ遠ざけておくこと——こうしたことは、戦後に合目的な政治を行ないうるためには、どうしても必要です。いずれにせよ、われわれは、非即事的な政治によって自ら選択の自由を制限してはなりません。われわれが将来ロシアをも永久に敵にまわすことは、いかにも得策ではありません。しかし、フランス一国のかわりに、今度はフランスとイギリスを敵にまわすことも同じように得策ではないのです。そのばあいには、ロシアはわが国にたいし協調のための諸条件を一方的に指示することができるからです。そうなれば、ロシアはわが国を意のままに動かすことができ、わが国はロシアのあやつり人形になるでしょう。ところが最近、——信じられないことですが——全ドイツ主義の影響下にある新聞にこんな標語が掲載されました。「われわれはロシアとの協調に賛成である、だから潜水艦戦争に賛成である。」つまり、ロシアがわが国を意のままに動かすため、われわれはわが国に敵対する世界中の国を戦場に呼び寄せたがっている、こういう意味です。こんな馬鹿げたたわ言を、わが国では国民的政治と呼んでいるのです。

戦後の協調政策は、いずれもわが国の実質的利益を起点しなければなりません。では、実質的利益とは何でし

ようか。わが国とわが敵とのあいだに——感情問題と虚栄問題をいっさい除いたあとでは——何が残っているでしょうか。

経済的理由が戦争の原因であった、と言われていきます。ほんとうでしょうか。フランスには経済的理由はどこにありますか。イタリアにはどこにありますか。セルビアには？ ルーマニアには？ だが、イギリスにはたしかにある、イギリスには経済的理由があるからこそ、イギリスはわが国の「本来の敵」なのだ、こうひとは言います。ほんとうにそうでしょうか。ロシアには、経済的理由がイギリスよりも少ないと言うのでしょうか。

しかしロシアとの通商条約交渉は、ほとんどすべてわが国にたいするロシアの戦争威脅に通じていました。たしかにイギリスは、わが国工業の競争を妨げました。ことに、多くのカルテルが行なった価格政策によって、つまり国内での高価格と国外での投売り価格、いわゆる「ダンピング」によってわが国工業の競争を妨害しました。他方で、ロシアはわが国農業の犠牲を要求しました。だが双方のばあいとも、こうした理由から戦争は起らなかったし、起ることもないし、今後もまず起らないでしょう。なぜなら、それは簡単な算術の問題だからです。まず、イギリスはわが国の海外貿易からほんとうに二十億から三十億マルクをいつまでも強引に巻きあげると仮定しましょう。つぎに、そのさい企業家の儲けと純労賃で年々四千万から五千万マルク以上がイギリスにころがり込むと仮定しましょう。——これは高目に計算してあります。しかしイギリスの今回の戦費利子は、現在すでに年間三十億マルク以上に達しています。こんなにひく目に計算する人はイギリスにはおりません。

しかし、オリエントでの利害対立をあげることができでしょうか。すなわち、ベルリン・バグダード線に反対する戦いです。これは純然たる経済問題だったでしょうか。これは調停できない対立だったでしょうか。経験によ

れば、否です。もしもこれによってオリエントにおけるイギリスの地位が政治的に脅かされるとしたら、いかにこの利害競争は戦争の萌芽を孕んでいました。政治的に脅かされなかったとしたら、戦争の萌芽を孕んでいなかったのです。それにしても、ロシアにたいするわが国の利害は一体どのような状況にあるのでしょうか。ここでは、バクダードではなく、コンスタンチノープルそのものが問題なのです！ トリポリ戦争の経験、オデッサでの破産は、当時ダーダネルス海峡が封鎖されたとき、コンスタンチノープルにたいするロシアの経済的利害を強力に前面に押し出しました。ロシアは、わが国が政治的に認めたくないことに、すなわちトルコの没落に経済的利害を持っている、しかも自分のあいだは持ちつづける唯一の勢力です。これにたいしイギリスとフランスとは、ロシアとドイツのように、古くから利害が対立していました。今日はじめて、この両国は、政治的理由からこれまでの態度を変えたのでした。トルコにおけるわが国自身の純経済的利益は、重要では「ありません」とはいえ、つぎのことはともかく頭に入れておかねばなりません。トルコでのわが国の事業純益から諸費用を差引いて計算すると、その利子で七千万ドイツ人のうちおそらく五万から六万のドイツ人が贅沢しなければ暮せる、ということなのです。究極的には、経済的理由ではなく、非常に重要な政治的理由が、トルコにたいするわれわれの態度を規定しています。オリエントをめぐる世界列強との経済的協調は、政治的対立がこれ以上なければ、おそらく即座に実現するでしょう。オリエントをめぐるロシアとの強調は、トルコの無条件な政治的保安が原則的に承認されないかぎり、政治的にも経済的にも困難です。ペルシアの牽制ということがしばしば語られました。これは、ロシアにとってはダーダネルス海峡での譲歩を埋め合わせるものではありません。結局トルコの国民的利益そのものにかんしては、トルコは戦後ふたたびわが国の金融市場のほかに西欧列強の金融市場を求めようと

するでしょう。このことは冷静に納得しておかなければなりません。わが国は、トルコにとって生来の友人です。わが国は、トルコにたいし政治的私欲を持つ必要がないからです。だからと言ってトルコは、わが国に経済的友好関係の絶対的独占を保証したくないでしょうし、あるいは、たとえ保証したいと思ってもできないことです。

最後に、ロシアにたいするわが国の状況にはもうひとつの経済的要素があります。この経済的要素とは、西列強には全面的に欠けているもの、すなわちロシアの民族帝国主義です。オーストリアの社会民主主義者は、これをロシア農民の土地飢餓者による膨脹傾向と呼んでいます。これは文化状態の結果です。土地飢餓者はいつかはいなくなるでしょうが、当分のあいだは増加するでしょう。

要するに経済的な利害情勢は、それだけでは決してロシアとの協調の方向で決着がつくことはありません。それにもかかわらず、経済的理由が実際の戦争原因ではありませんでした。戦争原因は、ほとんどいつでもそうですが、政治的性質のものでした。では、戦争の原因は何だったのでしょうか。

まずはじめに、フランスについて。とりわけ、当然のことですが、わが国が権力国家として隣接していることについてです。しかし、わが国がフランスを地上から抹殺することがないのと同様に、フランスもわが国を抹殺したりなぞしないでしょう。ここではエルザスという特殊な原因があります。十五年前にこの問題は、漸次ひたひたに解決されようとしていました。もしビスマルクの政治の根本的失策のためエルザス地方に、フランス人の目に——エルザス人自身の目にも——応急処理にすぎないと映りうる状態が作り出されなかったなら、この問題はとっくに解決していたでしょう。なんとしても、こうした状態に結末をつけることが、もっとも重要な和平

の保証のひとつです。フランスに代ってエルザス人を後見することができるのは、大国だけです。エルザスはつぎのばあいのみ財政的に繁栄できます。すなわちそれは、エルザスが、将来年間ほぼ四千万マルクの超過支出を行なわざるをえないことを怖れたりなどしないくらい大きな連邦国家に併合されるばあいです。こうした解決がそれぞれの政府のいがみ合いによって妨害されるなら、これらの政府は、戦争が実際に無益に行なわれるときには、恐ろしい責任を負うことになりましょう。しかし近年、さらに決定的な戦争原因がこれにつけ加わりました。すなわち三年の兵役期間が実施されて以来、フランスの教養層は、一致して戦争を避けられないものと考えたのです。「われわれみんながほんとに三年間兵營のなかで暮らすなら、われわれは野蠻人になる。そうなれば、われわれは白兵戦を行なう。そのあとでは、われわれは強力な軍隊を必要としなくなるか、さもなければ——軍隊がもはや役に立たなくなる。このどちらかだ。」このように、戦争の一年前に教養のある一フランス人が私に言ったものです。今や、こうした戦争原因は無くなるでしょう。一方では国の財政上の理由から、他方では全男性を訓練する必要から、すべての国で兵役期間は自動的に短縮されざるをえなくなるでしょう。そのとき、フランスとの——同盟ではなく——友好関係が実現するでしょう。

つぎは、イギリスについて。ドイツの競争が決定的な戦争原因だったのではありません。わが艦隊による威嚇妄想が決定的な戦争原因だったのです。イギリスの俗物は、上陸の危険をおそれていました。しかしイギリスの世界政策家は、イギリスの全艦隊を北海に集結せざるをえないことを我慢がならぬと考えたのです。これによってイギリスは、世界政策上の行動の自由を制限されたからです。またイギリスは、さもなければ決して払うことのない犠牲を他の国々のために払わざるをえなかつたからです。ここでは、事態は変わるでしょうか。いろいろ

なことが起つた後では、たしかに容易ではありません。しかし協調のための努力は、かつて國務長官フォン・テイルピッツの参加のもとで行なわれました。何故そうした努力は駄目になったのでしょうか。形式的なことです。目になったではありません。ひとつには、いずれの側も他方を信頼しなかったためです。それから、イギリスがすでに堅い約束をかわしていたため、協調の努力をするにはあまりにも遅すぎたことでも挫折したのです。ドイツは防衛艦隊を使用するだけでよいのですから、こうした状態が将来も変らないままでいることはありません。前提条件は、もちろん、ひとつは制海権が根本的に変化することです。おそかれはやかれ、イギリスは、このことを了承しなければならぬでしょう。さもなければイギリスは、将来軍事上の紛糾が生じたばあいつでも、中立の強大国との戦争にも脅かされます。なぜなら、わが国は、今日アメリカや他の中立国がイギリスの言いなりに従つたことに従つたりなどしません。アメリカも、自国の戦艦や商艦を持ちさえすれば、もはやイギリスの言いなりになつたりなどしません。ふたつには、その前提条件は、イギリスが「[自分も]生き、かつ〔他人も〕生かせしめる」という原則にもとづいて植民政策を行なうと公言することです。わが国は、分散所有のかわりに世界征服を行なう必要はたしかにありません。が、他の国々がしているように、わが国も占有地域の整理統合を必要としています。この整理統合によつて危険にさらされる者は誰もいません。ところで戦争以來、イギリスとドイツのあいだにはベルギー問題が発生しました。戦争の原因は、わが軍のベルギー進駐ではありません。このことは、イギリス人もドイツ人もよく承知しています。だが、ベルギーについての合意に達することが、言うまでもなく、正々堂々たる永続的対決の前提条件です。わが艦隊と連合してわが軍によるベルギーの永久占領は、イギリスにとつて最大の艦隊のほかには非常に大きな陸軍を持たねばならないことを意味していま

す。これをもつてしても、戦争がなかなか終結しないことの説明がきます。しかし、フランスとイギリスに向つていつまでも戦争の危険があるなら——たとえば、ベルギーが征服されたままであるなら——、この危険は將來わが国につきのような結末をもたらすでしょう。わが国は、ロシアと対等に協調することができず、ロシアに敗れること、これがその結末です。——こうした結末を目の前にして、ベルギーについてのわが国自身の利益は、今やどうなっているでしょうか。

まず第一に、わが軍のベルギー通過進軍はどういう意味があつたでしょうか。ベルギー征服の意図があつたでしょうか。どんなドイツ人でも、戦前にはそんなことを夢にも考えたことはありませんでした。そうではなくて、ベルギーの側で実際上の中立を行なわなかつたことです。そのばあい、ベルギーとわが敵国とのあいだの怪しげな交渉が決定的なことではありませんでした。この交渉は、ベルギーが自ら招いた状況の結果なのです。決定的なことは、ベルギーはいかにもわが国との国境の防備を固めはしたが、フランスとイギリスとの国境を固めることはしなかつた、ということにあつたのです。これは、たしかに「紙の上の」中立でしたが、実際上の中立ではありませんでした。フランス・イギリス軍が攻撃をしかけたさい、ギリシアの状態がさうでした。⁽³⁾ もちろんイギリスが自国の中立をわが国に確約したとしても、ベルギー通過進軍は、やはり余計なことでした。だが、周知のとおり、グレー氏〔イギリスの外相〕は確約しませんでした。と同時に、現在交戦中の諸列強が締結した保証条約は、一片の紙切れとなつたのです。中立国には——ベルギーがさうなろうと欲していたわけですが——自国の全国境を防備する義務がありました。こうした状況はベルギー人にもよくわかつていました。スイスでの演習のさい、ドイツ皇帝の談話が全新聞を通じて発表されました。「わが国のもう一方の側面は」(したがってベ

ルギーは)「無防備」である、と。スイスとオランダは自国の中立を實際に守りました。オランダは、周知のとおり、イギリスの反対を押し切って中立を守りました。ベルギーだけが中立を守らなかったのです。

わが国は、進駐後の現在、ベルギーについてどのような利益があるでしょうか。私の見るところでは、経済的利益はありません。ただし、経済的利益を個々の企業家の利益としてではなく、国民的利益と解するばあいには、アントワープはいつもドイツ以外の国の都市です。ベルギーの産業にはいつもロマン民族の息がかかっています。われわれは、二、三のドイツの船主、銀行家、企業家の利潤のため、わが国の労働者を異国民との競争で苦しめることになるの利益も持っています。わが国は、ドイツによるベルギーの管理に利益を持っているでしょうか。そうした管理は、およそナンセンスです。どんな事態が発生するかを考えてみるだけで十分です。わが国の官吏がいかに有能であるとしても、今日、まさしく戦時公法が背後にひかえているからこそ、事態は安定しているにすぎません。ドイツがいつまでもベルギーの後見役をつとめることによって、ベルギーを去勢してしまうことなど絶対に考えられないことです。こんなことを考える人は、文明化した民族の自尊心と名誉心の作用を軽視しているのです。わが国は、フランドル人の民族性が外国の文化に染まらないことに文化的利益を持っています。またフランドル人の民族性がフランスの影響だけをうけないことに政治的利益を持っています。しかしフランドル人は、フランスのかわりにドイツの支配を望んでいるなどはこれっぽっちも考えていません。ベルギーに暴動が起ったなら、この暴動は長く続くでしょう。そしてわが国は、西部で「軍事的に釘づけになり」二度とふたたび自由に行動することはできないでしょう。「そのとき」わが国は、ロシアに敗北を喫することになるのです。

われわれは、政治的なことにのみ利害関心を持っています。すなわち、ベルギーがわが敵国の侵入口になるはならないということです。もしわが国がベルギーを被保護国に格下げしないなら、ベルギーは侵入口になるにちがいない、——こうした意見は間違っています。ベルギー人は独立を望んでいます。現在はおもちゃの侵入口、近い将来でも、わが国にたいする憎悪がものをいいます。だから保証が必要なのです。それはどんな保証でなければならぬか、このことだけが問題です。「現実の」保証について語るとき、たいしては軍事的に有効な保証を意味しています。しかも保証など必要でなくなるまで続きたいへん長期の保証です。もしもオランダとベルギーのあいだに堅い中立同盟が成立するなら、そうした保証は今日すでに無用です。残念ながら、この中立同盟は、目下のところほとんど実現しそうにありません。ですから、全政治情勢の変化によって、「中立同盟を形成する」時期がつくり出されなければなりません。はやければはいほどよいのです。

イギリスの大臣たちは、わが国から「保証」を要求しています。彼らは、どんな保証を考えているかは言いません。ところが彼らは、わが国の保証の意味が何であるかを知っています。いずれにせよ、冷静な政治が行なわれるときには、その意味は、双方の側ともそうした保証が必要でなくなるまでの、したがって暫定的保証です。

今度はロシアです。ここでは、実際の戦争原因、つまり、政治的な戦争原因は、ひとつは官僚層と大公層の権力利害、もうひとつは汎スラブ主義の伝説でした。汎スラブ主義の伝説は、今回の戦争のなかで——これは重要な出来事ですが——とくにブルガリア人とポーランド人の態度によって打ち壊されました。これによって、オーストリアの崩壊とロシア官僚による全スラブ人の支配という夢はさめるでしょう。そうやってほしいものです。そうなれば、わが国だけが現在おそらく——確言できませんが——ロシアと協調できるでしょう。もちろんその

ばあいでも、スラブ問題だけが妨げになっているのではないこと、今日ドイツとロシアとのあいだには、バルト海問題、すなわちオーランド諸島問題も横たわっていること、こうしたことを考慮しなければなりません。ところが、ほんとうの難問は別のところにあります。なによりもまず、わが国が同盟国を持っていること、しかも同盟国を持たねばならないこと、ここにほんとうの難問があります。わが同盟国は東部にのみあり、西部にはありません。戦争は西部ではなく、東部で始まりました。わが国が併合によって東部のわが国土を整理統合するとしても、わが同盟国から決定的に重要な地点——たとえば、アルメニア地方——のいくつかの県を割譲させるなら、わが国は将来同盟政策を行なうことができなくなります。このことは肝に銘じておかなければなりません。われわれは、東部のわが同盟国にとって受け入れることのできる協調のみを受け入れることができるのです。

さらに、東部からの威嚇は、ロシアにおける人口増加の結果、将来ますます強まるでしょう。こうした事態は西部には見出せません。しかも、ことに、ロシアからの威嚇は、国民的権力国家としてのわが国の存在にたいして、向けられた唯一の威嚇です。イギリスは、おそらくわが国の海外貿易を麻痺させることができます。——今日のような連合が結ばれるばあいには、わが国の海外貿易を全面的に麻痺させることができます。フランスは、わが国土の一部を奪い取ることができます。「ところが」ロシアは、勝利を収めたあかつきには、わが国の独立を否定することができます。

したがって、いずれにせよ、ロシアとの協調は容易なことではありません。ロシアとの協調は、はっきり言えば、ロシアが少くともセルビア問題とポーランド問題について欲を出さなければあいに、実現しうるにすぎませ

ん。なぜなら、双方の問題ともオーストリアとわが国にとって死活問題からです。しかも、威嚇が続くのだから、永続的な保証が行なわれるばあいのみ、そして威嚇が増大するのだから、非常に強力な保証が行なわれるばあいのみ、この協調は可能です。

さて最後に、ロシアは、わが国の国家的地位を脅かすばかりでなく、わが国の文化全体を、さらには世界の文化を脅かします。それが今日のような性格のものであるかぎり、脅かします。こういう具合で、このことは他のいかなる国にも見当りません。世界史のなかでみれば、西部での——ベルギーのために生じた——争点は、世界の決定を意味する東部における事態の展開にくらべるなら、将来になれば些細なことに見えるでしょう。

われわれ自身も、東部で——だが（フランドル問題が解決したあかつきには）西部ではなく——わが国境の外側に文化的課題を持つでしょう。文化課題だって？　こう言って、現代ドイツの自称「現実政治家」は肩をすくめます。奇妙な仕ぐさです。ほかの国民は現実政治を行ない、それについてお喋りなぞしないからです。だがドイツ人は、現実政治からも、女性的な——と私は言いたい——熱情をかたむけて信じている贅言を引き出すにちがいありません。「文化」は現実政治的には今日どんな意義があるでしょうか。（わかりやすいように、ここでは「文化共同体」のことをさしあたりは言語にもとづく共同体、つまり言語・文学共同体という意味での「民族」としておこう。）戦争は国家の威光を著しくたかめました。「民族ではなく、国家」ということが合言葉です。これは正しいでしょうか。オーストリアの将校にむかって、部下とのあいだにドイツ語の命令用語を五十しか共有していないがために生ずる根本的困難について一度問うてごらん下さい。あなたは聖壕のなかで、部下との共同行動をどのようにすすめるつもりか。不測な事態、つまりあの言葉では間に合わないことが起ったとき、

あなたはどうするつもりか。いわんや敗けいくさのときには？と。さらに東の、地上最大のロシア軍をごらんなさい。国家はたしかに多くのことをなしうるが、しかし個々人の自由な献身そのものを強制する力は持っていないことを二百万の囚人が有弁に物語っています。そのような献身がなければ、今大戦の開始にあたってドイツの内的再建はありえなかつたでしょう。

こうした文化の意義は、しかしわが国にとって、否定的な帰結をも持っています。われわれはこのことをはっきりとわかっている必要ありません。わが東部国境の彼方の政策は、まさしく現実政策であるなら、西スラヴ民族の政策たらざるをえないのであって、ドイツ民族の政策であってはなりません。これが戦争の運命であること、これこそ核心をついた洞察です。われわれは、こうした洞察を失わないため、道徳的自制を持たなければなりません。クルラントにいる二、三十万のドイツ人植民者たちといえども、このことを変えることはできません。私はこの人たちの感情政策的意義を見くびってはいません——が、現実政策的にはそれは全然重要ではないのです。わが国が東部でドイツ人のための民族政策を行なうなら、われわれは、両国のあいだにいる千五百万のスラブ人を永遠に「わが国の」仇敵にまわし、ロシアの側においやるでしょう。

さて、以上述べてきたことから何が導き出せるでしょうか。まず第一に、敵国の人びとの名誉を傷つけるような講和目標は、すべて馬鹿げていること。こうしたことを、ビスマルクは一八六六年に賢明にも回避しました。つぎに、イギリスとの協調は、感情政策的に、およびひと度生じた不信のために、当面はたしかに困難であること、だが将来は、ロシアにたいしもっと重大な難問が生ずること。なぜならロシアは、いつでも、より危険な隣国だからであり、しかも次第に強力になりつつあるからです。「したがって」わが国は、西部では暫定的な保

証だけでよいが、東部では永続的な、西部よりも強力な保証が必要であること。ロシアとの永続的な協調は、たしかに可能だが、ロシアの政治的基礎が著しく変わるばあいのみ、すなわちその侵略衝動が制限されるとかその膨脹目標が変わるばあいにのみ、可能であるにすぎないこと。——だが、当り前のことですが、ひとつのことだけははっきりしています。すなわち、われわれは、戦後いかなる事情のもとでもわが国によりよい保証を与える国と——そう望んでいる国とならどこの国とでも——協調することです。われわれも、そのような国にたいしてはあらゆる友好関係を全面的に保証することができます。だがこの問題は、非即事的な動機から、つまり憎悪からも虚栄からも自由でなければなりません。国内政治的共感からも自由でなければなりません。

私は、これまで敵国についてだけ話してきました。わが同盟国にたいするわが国の関係では、オーストリア、ハンガリーとわが国との関係のみが錯綜した問題を持っています。この大きな隣国の君主制の政治がわれわれに別の状態を無理矢理に押しつけないかぎり——そうならないと思いますが——、われわれの利害関心は、いつでも、同盟をますます緊密に形成する方向にあることは言うまでもありません。われわれはそのばあい、わが友ナウマン君のすぐれた本（原註）のことを考えています。彼の直観のみがわが国とかの国に、今日双方の政治家たちがそれぞれ国政を執ることができる強力な与論の素地を作り出しました。

原注 「フリードリッヒ・ナウマン著」『中欧論』（一九一五年）

今や、客観的な政治的考慮だけが目標にいたる道を決定するものでなければなりません。困難は、とうぜん少なくなりません。経済的要因はここでも決定的ではないのです。関税政策上の比較的強固な結果がわれわれにと

って「うまい取引」であるかどうかは、まったく不確定です。決定的問題は、とうぜんここでも、政治的なものです。関係諸王朝も諸民族も自らの活動の自由をすすんで制限することなどしないでしよう。そのさい状況は、われわれにとつてほんとうに容易なことではありません。二つの君主制国家が密接に結びつけば、両国の内外政策と経済政策の諸結果は、すべてわが国にかぶさってきます。経済的統一をすすめようとする試みがあります。この試みは、成功したあかつきには、経済的競争から生ずるあの気まずさをことごとく相互の關係に持ちこみます。いずれにせよ、つぎのことははっきりさせておかなければなりません。軍事協定の内容が、双方にとつてとりわけもつとも重要である。たとえばどんな関税問題よりもはるかに重要であるということです。もしも新しい發展が現在に比べてひとつひとつの進歩を意味するなら、両国の軍隊は、その内部組織の点でも戦争の命令についても、あたかもひとつの軍隊内の編隊のごとく一致協力しなければなりません。とはいえ、そのばあい、両軍の軍事統帥権はまもられていなければなりません。こうした軍事協定は、解消可能な同盟の基礎のうえでは実現しがたいことです。この種の試みは、双方の側から、とりわけおおくの信頼を要求します。双方の側とも、そうした試みが細かい点で直ちに自分の理想に合わないとしても、落胆してはなりません。双方にとって都合な正しい方向で努力がなされるなら、事実の重みは形式的内容をこえて先に進みます。七十年代のことですが、ドイツ帝国へのバイエルンの編入にかんする交渉がビスマルクのいるところで話題に上ったことがありました。宰相の筋向いにバイエルンの連邦参議院全權使節が座り、この両名のまわりに国民自由党の代議士が「座りました」。バイエルンの留保権にかんするデリケートな問題——この問題が最初に与えた失望——に話が及びました。宰相はおよそつぎのように述べました。たしかにドイツの与論は——バイエルン自身の与論も——、戦争の影響下で

こうだった。われわれは、強力な圧力を加えることによって、バイエルン政府からおそらくもっとたくさんのも
のを獲得することができたであろう。「だが」、宰相はテューブルのうえにおいた手をバイエルン使節の方にのば
しながら続けました。「もし友人がその手を私の掌中におくなら、私はそれをにぎりつぶしたりなぞしない」

——そして彼はこぶしを固めました。私は、その直後そこに出席した人から話を聞きました。印象は強烈でし
た。それは当時のドイツ政治の雄姿でした。ビスマルクが言ったことはまもられた、と私は思います。——バ
イエレン王朝とバイエルン邦民は彼らの寄せた信頼を後悔するまでもなかったのです。そして「北ドイツ連邦
とバイエルンの」関係は、若干の問題があったにもかかわらず、満足のいくものでした。ところで、同程度に
強大ないくつかの国家間の同盟の問題は、もちろん北ドイツ連邦とドイツの強力な一邦国とのあいだのそれと
は別です。後者のばあいには、バイエルンの方だけが抑圧されないという信頼を持ちさえすればよかったので
す。しかし前者のばあいには、双方がこのような信頼を持たなければなりません。われわれの方も持たなければ
ならないのです。ここに至って私の話は、ついにもっとも重要な点に達しました。ここで、信頼を持っているか
どうか明らかにされなければならないし、明らかにされるからです。セルビアとポーランドが共同で征服され
ています。同盟にたいするわが国の忠誠の証は、オーストリアとハンガリーが要求するとおりにセルビアが処理
されることです。わが同盟国の忠誠の証は、わが国の生存利害が必要とするとおりに被征服国ポーランドが処理
されることです。ポーランド問題は、わが国では帝国の首都の入口にまで及んでいます。どの地図を見ても明ら
かなように、コンGRES『ポーレン』ウィーン会議におけるロシアへのポーランド割譲領土の運命は、シュレー
ジエンの運命を左右し、オーストリアよりも比較にならないくらい密接にわが国と関係しています。わが国と敵

対している隣国の君主制に影響を与える一セルビア人〔危機の発火点〕を、戦争の結果わが国のすぐ近くに置いておくことを望む者は、誰もいないでしょう。わが国にとってもオーストリアにとっても、またポーランドにとっても、満足のいくほどに円満なポーランド問題の解決はありません。純政治的にみて、戦前の状態は、ロシアがポーランドをわが国にたいする作戦根拠地に仕立てないでいたあいだは——まさに仕立てようとしていたのですが——、わが国の利害にとって堪え得るものでした。戦前のあつた状態は、今日ではもはや不可能です。ポーランドはロシアの侵入口になり、ポーランド人自身は残らずロシアの統治下での統一の支持者に〔なりました〕。ガリシア地方のポーランド人とおそらく当初はコングレス＝ポーレンのポーランド人の一部がオーストリアへの編入を望んでいたことは、今や周知の事実です。だがもちろん、この編入は、永遠に破棄することのできない国家同盟が、わが国とオーストリア＝ハンガリーとのあいだでほんとに結ばれるばあいのみ可能です。しかもこれらの三国は、それぞれ主権を持っているにもかかわらず、永遠に解散しない連合体を形成しなければなりません。そのさい国家同盟とは、恒久的軍事同盟のほかに、完全な経済、関税、銀行、通貨の共同体の形成を意味します。単なる協定だけでは、編入は無理です。あの望みをかなえてやることは、政治的にみて、おそらくわが国にとってたいへん得策です。そのためには、われわれは、非常に大きな政治的経済的犠牲を払うことさえ辞さぬほどです。私はこのことについていまは論じないでおきましょう。というわけは、わが同盟国の方でまず最初に、自分たちがこれを行うことができるかどうか、これを望んでいるかどうか、を決意しなければならぬからです。プロイセンのポーランド人と、徐々に勢力を増しているコングレス＝ポーレン党は、同盟国として——だが独立国として——わが国への編入を望んでいます。これの解決は、比較的簡単です。経済的には、わが国は

この国から最惠国待遇を受けるだけでよいのです。その他の点では、わが国はまもることができないことを約束しないこと、約束したことはすべて忠実に実行すること、——こうした態度が決定的に重要です。しかし、わが国は約束を実行することができません。わが国は、一九〇五年の革命のさなかに、ポーランド人自身がロシアに提出したあの要求をはるかに上回らわって満たすことができます。そうなれば、この国民は完全な自治を持つことになるでしょう。強大なロシアの軍勢を眼前にしたわが東北部国境にたいし、わが国は軍事的にのみ保証を獲得する必要があります。ポーランド人ですら、これを誤解したりなぞしません。

一体われわれは、ポーランド人とどんな関係があるのか、こんなことが話題になったし、右翼の政党指導者も話題にしてみました。私はくり返して言います。ポーランド人はベルリンの入口にまで来ている、と。私は、ポーランドの敵であると思われていました。二十年前にレムベルクからもらった署名入りの手紙を今でも保管していますが、この手紙には、私の曾祖母が蒙古豚の餌食にならなかったのは残念だと書かれています。——ポーランド人は、私がそんな目に会わないようもってくれたでしょう。だが今日では、どうかわかりません。たしかに私は、より安価な人足制度——外国人労働者による労賃の引下げ——をもとめる民族間競争に反対し、全ドイツ協会から脱退しました。脱会の理由は、この協会がより安いスラブ人労働力にたいする大土地所有者の利益を民族の利益に優先させたからです。ポーランド人にたいする全ドイツ主義の愚かな効果のない言語政策に、私は一度も協力したことはありません。しかし今日、私が戦前、全ドイツ主義の影響下にあった同僚たちに予言したとおり、——国内でも国外でも——状況はすっかり変わりました。国内では、他のあらゆる人たちと同じように自分の義務を果たしたポーランド人にたいし、誠意ある協調が行なわれなければなりません。しかしわが国境の彼方

では、つまりポーランドでは、要するに東部では、ひとたびこのような戦争がはじまったからには、わが国は、大ドイツ的政治を行なうことはできません。できないどころか、この戦争が西スラブ問題をまきおこすこと、そしてわが国が、自ら望まないばあいですら、東部で小民族の解放者になること、——これがわが国の運命です。（それにもかかわらず、プロイセン下院に上呈されたポーランド問題にかんする法案とこの法案についての右翼政治家たちの演説は、——他のことを無視しても——彼らの政治的な判断力や判断しようとする意思がまったく駄目なことを証明しています。なぜなら、これらの指導者たちは、こうした歩みがあったことを他の人たちと同様に少なくとも数ヶ月前からご存知だったからです。）

敵のきまり文句のひとつとして、「小国」の問題が提起されました。もし敵がほんとに民族自決の原則に基いて講和の締結を望むなら、われわれはいつでもこれに応ずる用意があります。——われわれは全世界にむかって声を大にしてこのことを宣言しましょう！ しかし、「殺し屋どもは仕事を始めるがよい！」だからそのばあいには、講和条約にはつぎのことを謳う必要があるでしょう。アイルランド、マルタ、ジブラルタル、エジプト、インド、ボリア人、インドシナ、モロッコ、チュニス、アルジェリアのアラブ人、ポーランド人、ウクライナ人、リトワニア人、ラトヴィア人、エストニア人、フィンランド人、コーカサスの諸民族——つまり、敵国によって問題なく支配され、搾取され、わが軍の機関銃の銃口のなかへ追いたてられているこれら三億五千万の異民族——は、自分自身の国家を形成することを欲するか否か、これらの諸民族は、この選択を——かりに——人道主義的な合衆国大統領の監視のもとで行なわれる自由な投票を通じて表明しなければならぬこと、これです。そのさいわれわれは、いかなる原則も無意味になるまで押しすすめることはできないことを、敵側にこそ認めたいと

思います。政治上の境界を標示する三つの合理的な構成要素——軍事的安全性、経済的利益共同体、国民的文化共同体——は、地図の上では一致するものではありません。軍隊をそなえ経済政策を行なう国家が存在するかぎり、あの原則のあいだの妥協は避けられないのです。わが国ですら、西部でも東部でも異民族の土地に軍事上必要不可欠なもののはかはなにも占有していません。東部では、わが国境の内側にドイツ人とポーランド人が同じ土地に村落をなして入りみだれて隣りあわせて住んでいるため、境界線を引くことはできません。オーストリア

Ⅱハンガリーの諸民族をいくつかの独立した国民国家にはっきり区分することは、地理的にみても不可能です。たとえ区分しても、国境設定の点で政治的にも経済的にも無意味になるでしょう。ここでは、民族を越えた国家制度のかたちで民族連合体だけがいつまでも可能です。だがわれわれの敵は、民族自決の原則に本気で取組むことなど考えることができないのです。もし本気で取組む気があったら、フランスの世界帝国は、——ロシアやイギリスの世界帝国もそうですが——最初からこの原則でことを処していただしよう。ところがわが国は、自国の利益のためにこれに本気で取組まなければならぬのです。民族の枠を越えて権力国家の原則をかつき出したのは、わが国ではありませんでした。わが国は、インド人、ビルマ人、コーチシナ人、アラブ人、リトワニア人、ウクライナ人、ジョージア人、フィンランド人のような、独自の——一部は大古からの——文化を、すくなくともロシアに比べてはるかにすぐれた文化を持つ住民が住んでいる植民地を所有していません。

しかし言うまでもなく、わが国もまた権力国家です。そしてわが国が権力国家であること、このことが最後の決定的な戦争理由です。もしわが国を絶滅するのに成功したら、敵は、みんな世界を思いのままに分割するでしょう。しかもそうするのに、現在の軍隊を半分維持するだけで足りません。反軍国主義闘争をめぐるおしゃべり

は、この点では真実です。それでは最後に一体何故わが国は権力国家になったのだろうか、こう問いましょう。大権力国家を形成していない諸国民——スイス人、オランダ人、デンマーク人、ノルウェー人、スウェーデン人のような「小」国民——は、小国民なるがゆえに価値が少ないでしょうか。どんなドイツ人でも、こんなことを主張しようなどと考えたことはありません。

諸民族の歴史のなかで、権力国家と外見上の小国民とはそれぞれ別の使命を持ち続けます。七千万の大権力国家は、スイスのカントンやデンマークのような国がしえないことを、たくさんしとげることができます。だが、前者が後者よりわずかしかできないこともたくさんあります。文化領域のうえでも固有な政治価値においても、このことはあてはまります。市民の大多数がお互いに知り合いであるか、もしくは知り合いになることができる小国にのみ、—「スイスの」アペンツェルのように、全住民がもはやひとつの場所に集まるのではなくとも、中都市におけるように、すくなくとも一人一人の住民が行政を見渡すことができるくらいの小国にのみ、真の民主政治は存在します。しかもこのような小国のみ、個人の信頼と個人の業績にもとづく真の貴族政治が一般に可能です。大衆国家では、民主政治も貴族政治も、もとの姿がわからなくなるくらい変わっています。すなわち、国民選出の行政や名譽職的行政のかわりに官僚制度が、国民皆兵のかわりに精兵制度が不可避となります。これが、大衆国家に組織された国民のまぬがれない運命なのです。それゆえに、スイス人ヤコブ・ブルックハルトは、『世界史的考察』のなかで権力を歴史における悪の要素として評価しました。われわれの誰もが、わが民族の一部に、すなわちドイツ系スイス人に、小国の長所をまもり、小国の繁栄をもたらす機会が与えられていることを運命の摂理だと感謝するでしょう。いずれにせよ、われわれは、こうした特殊な状況とスイス人の特殊な価値を認

めるだけの公平さを持ちあわせています。ところが、わが国の「軍国主義」について、彼らは、大層慎重な「中立」ぶった口調でほんとに馬鹿馬鹿しい、しかも不愉快な偽善的辞言を多く弄しています。ああしたお喋りは、どうしても納得できません。何故われわれ自身、このような政治権力の宿命に身をゆだねることになったのでしょうか。虚栄からではありません。われわれの歴史にたいする責任のためです。後世の人は、スイス人、デンマーク人、オランダ人、ノルウェー人から世界の文化形成について弁明を求めるところはないでしょう。地球の西半分、アングロサクソン民族の慣習とロシアの官僚制以外のなにも存在しなくとも、後世の人は彼らを非難しないでしょう。そして、これは正しいのです。なぜなら、スイス人やオランダ人やデンマーク人は、これを妨げることはできないからです。だが、われわれにはできません。これらの世界征服強国にはさまれた七千万国民には、権力国家になる義務がありました。われわれは権力国家にならねばならなかったし、世界の未来を決定するさいに話の仲間入りするため、この戦争に賭けなければならなかったのです。敗けるのではないかという不安があったとしても、われわれは、すすんでこうせざるをえなかったのです。その理由は、もしわれわれがこの義務を臆病と怠惰から忌避していたら、後世と同世代にたいして恥をかいただろう、という点にあります。わが民族の名誉がそれを命じたのです。名誉のために、地図の書きかえや経済的利潤の変更のためではなく——このことを忘れてはなりません——、ドイツは戦争しています。われわれ自身の生存だけが問題なのではありません。わが国の権力の傘のもとで、いくつかの小国民がわが国をとりまいて生活しています。もしもロシア、フランス、イギリス、イタリアがわが国の軍隊を怖れるに足りないとしたら、スカンジナビア人の独立はどうなるでしょう。オランダの独立はどうなるでしょう。〔スイスの〕テッシン州はどうなるでしょう。強大国相互の勢力

均衡のみが小国の自由を保証するのです。

いかにも、今大戦における問題は、こうした責任だけではありません。もしもわが国が敗れたら、最低の部屋
の最下層の労働者でもわれわれの子孫に責任を感じるでしょう。もしもわが国が敗れたら、このような節約、戦
争の貫徹が今日数十万の人びとのうえにもたらしたところの、そしてこれからもたらすであろうところのこ
ような困窮、自らせばめたこのような生活領域、これらがドイツ人大衆の永遠の運命になるでしょう。なぜなら、
世界は次第に一杯となり、移民による利益は閉ざされるからです。文化の大衆化とともに、言語共同体は大衆
のところでも排他的になります。民族的対立は、かならずやもっと厳しく〔なり〕、それぞれの国語のなかで大衆
作家の理念のおよび経済的利益と密接に結びつきます。戦争の損害によって経済的に荒廃したドイツは、ドイツ
の商品を投売り商品として、ドイツの労働力を日雇い人夫として世界市場に放出するでしょう。もしこうなれば、
そのときはじめて、ほんとうの「ドイツの危機」が訪れるでしょう。だが同時に、これはドイツ人にバリア的地
位をもたらすでしょう。だからこうしたことは、わが国が勝つかどうかにかかっています。

もしわれわれがこの戦争に賭けたくないなら、われわれは帝国の創設を中途にしてなげ出し、小国の民族とし
て生き長らえることもできたのです。そうしたとしても、もちろん、われわれは戦争そのものにはたいする不安を
拭い去ることはできないでしょう。フランスのエルザス占領によって、フランス人にたいするわれわれの不安を
拭い去ることができなかったのと同じです。いずれにせよわれわれは、戦争を行なっていたでしょう。ある人は
ライン同盟国としてフランスのために戦い、他の人はロシアの代官としてロシアのために戦い、あるいは、これ
ら両国のために——かつてはいつでもそうであったように——戦争の舞台をつとめざるをえなかったでしょう。

だが、そのばあいには、われわれはドイツの戦争というものの感激を知りません。わが国が、結局は、七百万ではなく七千万の国民であること、このことがわれわれの運命でした。このことが、たとえまぬがれようと思つても、まぬがれることのできない歴史にたいするあの逃れえない責任の基礎をなしていました。今日、この際限のない戦争の「意味」が問われるなら、以上のことを自分自身くり返しはつきりさせなければなりません。われわれが耐え抜かねばならないこの運命の重みは、国民を、没落の奈落と危険を避けて、引き返しがきかないところの名譽と栄光の険しい道のうえに、世界史の支配する澄んだ敵しい大気のなかへ引きあげるでしょう。国民は、恐しいがしかし力強い自分の顔のなかにこの世界史を凝視しなければならなかったし、凝視することができたのです。こうした国民のことを、後世の子孫は不滅の記憶にとどめるであります。

- (1) 第一次大戦勃発以後、イギリス海軍とドイツ海軍は、開戦の年の八月と翌年二月に小海戦を試みたのみで、小康状態を保っていた。しかし一九一六年五月三十一日未明、かねてより艦隊出動の機をうかがっていたドイツ海軍司令官ンエール中将は、イギリス艦隊の一部がノルウェー南岸沖に出没するとの情報を得て、これを撃滅せんとスカゲラク海峡にむかつて全艦隊を率いて急行した。他方イギリス海軍の主力も、これを向えうって出動し、ここに両国の海軍は、開戦以来最大の海戦を展開した。この海戦に参加したドイツの戦闘艦二十一隻、イギリスの戦闘艦三十七隻で数の上ではイギリスの方が優っていたが、しかしイギリス側の損害の方がより大きかったため、この海戦は、ドイツ海軍の輝かしい勝利とみなされた。しかしながら、イギリス海軍による北海封鎖はその後も依然として続いたため、この海戦でのドイツ海軍の勝利も戦局の上にはなんら決定的な変化をもたらすことができなかった。

- (2) 三国同盟は、一八八二年、ビスマルクのドイツ帝国安全保障体制の中核として、ドイツの主導のもとにオーストリア、ハンガリー、イタリアのあいだで締結され、その後一八八七年、一八九一年、一九〇二年と三回にわたって更新さ

- れた。しかしビスマルクの失脚（一八九〇年）以後におけるドイツをめぐるヨーロッパの国際情勢が次第に変化していくなかで、イタリアはイギリス、フランスとの外交的接近を次第に深めていったが、これとは逆に、ドイツ、とくにオーストリア・ハンガリーとイタリアとの外交関係は次第に冷却していった。そして大戦勃発にさいしては、イタリアは、三国同盟の一員であるにもかかわらず、中立を宣言して事態の成行きを静観していたが、やがて一九一五年五月三日、三国同盟を破棄し、オーストリアにたいし宣戦を布告した。ドイツにたいしては、なおしばらく国交断絶状態を保っていたが、ついに一九一六年八月対ドイツ宣戦を発表し、ここに三国同盟は名実ともに破綻したのであった。大戦勃発当初、中立を宣言していたギリシャは、国内では、協商国と提携して参戦を主張する親協商派と中立維持を固執する親ドイツ派とに分れて相争っていた。一九一五年はじめ、イギリス・フランス連合軍がダーダネルス海峡にせまるや、親協商派は、この機にドイツ、オーストリアに開戦せんことを主張したが、親ドイツ派のコンスタンチン国王はかろうじてこれを押えて、中立を維持した。その後、イギリス、フランス軍のサロニカ上陸通告にさいしても、親協商派の首相ヴェニゼロスは、国内与論の分裂をおそれ、裏では便宜を与えつつも、表面上これに抗議の態度を表明し、型ばかりの中立を守った。しかし一九一六年末には、フランス軍のアテネ上陸、イギリス・フランス艦隊によるギリシャの海上封鎖によって国内の親ドイツ派は破れ、一九一九年六月三十日、ついにギリシャは、ドイツ、オーストリアならびにブルガリア、トルコにたいして宣戦を布告することになった。

解 題

マックス・ウエーバーは、一九一六年十月二十二日、ミュンヘンの進歩人民党の指導者ハウスマンの求めに応

『ヨーロッパ諸列強のあいだのドイツ』

『ヨーロッパ諸列強のあいだのドイツ』

じて、ミュンヘンにおいてひとつの政治講演を行なった。演題は、『ドイツの世界政治上の位置』(Deutschlands weltpolitische Stellung)である。この講演は、同年十一月九日の『ヒルヘ』誌に『ヨーロッパ諸列強のあいだのドイツ』として掲載された。当翻訳は、J・ヴィンケルマン編の『政治論集』第二版(一九五八年)に同誌より転載された論文を底本としている。なお、『ヒルヘ』誌への掲載にさいしては、当局の検閲を考慮して、純軍事的問題のデマゴギーにかんする議論は省略された、と言われている。

この講演が行なわれた当時、ドイツ軍は、西部戦線においてはヴェルダンの強襲、ソナムの攻防戦をのり切り、東部ではヒンデンブルクの指揮下、ロシア軍の攻撃を喰い止める一方で、新たに連合軍側についたルーマニアを攻めてこれを撃破し、再びドイツ陸軍の威力を世界に示した。しかしそれにもかかわらず、ドイツ軍の兵力は大いに消耗し、イギリスによる海上封鎖も徐々にその効果をあらわしはじめていた。かねてより早期講和を主張していたウェーバーには、今こそ、数百万にのぼる捕虜と数十万平方キロにおよぶ占領地域とを条件にして、講和交渉を開始すべき最後のチャンスが訪れたように思われたのであった。みられるとおりウェーバーは、早期講和の根拠を、西にイギリスとフランス、東にロシアという強大な権力国家にとりまかれたドイツ帝国の特殊な地理的状况にあると考えた。ドイツが、将来、これら諸列強と肩を並べて世界政策を遂行しうるためには、感情的な併合政策ではなく、冷静な同盟政策、とりわけイギリスとの協調が不可欠であった。しかしながら、ウェーバーにおける早期講和の立場は、政府の戦争政策に対決しながらも、決して戦争そのものを否定する意図に発するものでなかったことは注目に値する。ウェーバーの考えでは、ドイツ帝国がヨーロッパの中央に位置する権力国家として組織されている以上、この戦争に避けて通るわけにはいかないものであった。それは何故か？ 将来の

世界の文化は、ロシア民族とアングロサクソン民族の文化のみによってぬりつぶされてはならず、したがって権力国家ドイツには、ヨーロッパ弱小国の文化を庇護するという「歴史にたいする責任」が課せられているからである。「強大国相互の勢力均衡のみが小国の自由を保証する」とウェーバーは言う。ウェーバーの政治思想におけるこうした権力と文化との宿命的な関連とともに、小国の文化の保証によって正当化された大国のバランス・オブ・パワーの考え方に、われわれは、帝国主義時代の自由主義的政治思想の主要な特徴のひとつを見出すことができる。

(一九七〇・五)